

### 運輸分野で国の基盤づくりを支えたい

港湾や鉄道、空港など人々の生活を支える運輸分野を中心に、国際協力の道を突き進んできた田中賢子さん。海外事務所や国際機関での勤務経験を生かし、開発途上国の経済発展を後押ししている。

#### 国際協力への思い、 運輸分野が活躍の場に

大学生のころ、第二外国語として学んでいた中国語の研修で北京を訪れました。当時、経済が停滞していた日本に比べ、中国は活気に満ちていて、そのダイナミズムに衝撃を受けたことを覚えています。この経験が、国際協力の仕事を指すきっかけとなったのです。その後、4年生の夏にはベトナムを縦断。卒業論文ではホーチミンの都市交通政策をテーマに選びました。

大学卒業後は違う分野の政府系金融機関に就職しましたが、国際協力の分野に挑戦しようと思い、退職してアメリカの大学院で国際開発政策を学びました。帰国した2001年、就職先として選んだのは国際協力銀行（JBIC）です。以後2008年にJBICの円借款担当部門がJICAに統合されるまで、円借款の案件形成・監理や新JICAの統合準備などに携わりました。また、この間に2年間駐在したベトナムのハノイ事務所では、主に運輸分野を担当。常時20件以上の案件を抱えていたため多忙を極めました。この経験がその後の運輸分野での業務につながっています。

#### 相手国に寄り添う インフラ支援を目指す

2008年からは、JICAの職員として、

円借款の事前・事後評価を担当する評価部や、東南アジア・大洋州部での業務を経験してきました。東南アジア・大洋州部でベトナム担当になったとき、ハノイ事務所時代に運輸や都市開発分野で一緒に仕事をしてきた現地政府の人々と、案件を通じて再び協働する機会に恵まれたことは幸運でした。

現在、社会基盤・平和構築部で担当する港湾や鉄道、空港分野には、日本政府が発表した「質の高いインフラパートナーシップ」の中核とも言える案件が多くあります。インドの高速鉄道建設事業もその一つです。インド政府とJICAが共同調査を進める過程で、私も頻りに現地に出張し、相手国政府の要望を聞きつつ、日本チームの一員として提案を行ってきました。その結果、昨年12月の日印首脳会談で、日本の高速鉄道の技術と経験が活用されることが決定。とてもうれしく思っています。

運輸の案件は規模が大きく実施に時間を要しますが、その一方で途上国の社会・経済は変化が速いため、歯がゆい思いをすることがあります。また、質とコストのバランスを考慮しつつ、その国に本当に必要なものを見極めることも大切だと感じています。そうした難しさを相手国と協議しながら乗り越え、完成したインフラを実際に人々が使っている様子を目にする瞬間は、この上ない喜びです。



社会基盤・平和構築部  
運輸交通・情報通信グループ  
第二チーム

田中 賢子  
TANAKA Satoko

米国デューク大学で国際開発政策の修士号を取得。帰国後、国際協力銀行（JBIC）に入行。2008年のJICA-JBIC統合後はJICA職員として勤務。アジア開発銀行勤務を経て昨年より現職。



ミャンマーの「鉄道安全性・サービス向上プロジェクト」の最終合同調整委員会で終了時評価報告書に署名する両国関係者

実は、現在の部署に来る前の3年間は、休職してアジア開発銀行に出向していたのですが、配属となったバングラデシュ事務所でも運輸交通案件の形成や実施に携わることができました。さまざまな国の職員が働く国際機関では、組織内での日本のプレゼンスを意識することが多かったように思います。一方、JICAが重視するのは支援先である途上国に対する日本のプレゼンスです。JICAを外から見られたことで、日本の代表として仕事をするこのやりがいと再確認する機会にもなりました。

私たちが目指すのは、「人々の希望を叶えるインフラ」です。途上国の人々の顔をいつも忘れず、信頼されるパートナーとして、国を支えるインフラの発展を後押ししていきたいと思っています。



バングラデシュの鉄道プロジェクトで工事現場を視察する田中さん(中央)